

一九八二年一月二十日の講義 第二時限 (pp.126-146)

ミシェル・フーコー講義集成 < 11 > 「主体の解釈学」(1)
(コレージュ・ド・フランス講義1981-82)
ミシェル・フーコー著 廣瀬 浩司・原 和之訳 筑摩書房 (2004年)

担当：ばんこ

自己への配慮における、**時期（年齢）**の変化

- 自己の実践における、時期の変化（思春期の終わり→成熟・成人した時代）
- この時期（年齢）の変化は、以下のことをもたらしめている

1. 自己の実践における、批判的機能育成の機能

→自己への配慮は育成（training）の機能に加えられ、その後育成の機能を覆い尽くしてしまう

2. 医療との近接性

- プラトン：身体 of 技法と魂 of 技法ははっきりと区別されている
- 『アルキビアデス』：魂が自己の手当の対象になっていた

↓

身体 of 再統合が、明確におきる

＝その結果自己へ配慮は、自分の魂と自分の身体に同時に配慮すること、となる

- セネカの手紙...心気症的
注2) 「セネカの手紙は、健康とか養生とか変調とか、体と心のあいだを行き来する可能性のあるあらゆる不調に向けられるあの注意について、多くの例を提供していると考えられる」
- 医術と自己への配慮を同時に描き出すこと
＝自己への配慮における、魂と身体 of 混ざり合い

3. 老年に、重要性と新たな価値が与えられる

- 老年の価値は、伝統的に曖昧で限定されていた（老人は若者に忠告できるが、若者から守られる存在でもあった）
- 老人は尊厳に値するものの、「老人になりたい」「老人が望ましい」と言うほどのものではなかった
- 時代を経て、自己への配慮が、生涯を通じて、かつ成年期に実践されるべきものになった
→自己への配慮が成功した結果と、自己への配慮の最も高度な形式、自己への配慮が報いられる時期は、老年期になった
※キリスト教と来世への約束とは、異なるシステムであることに注意

- 死の問題に対置して捉えられるシステム（後述される「死の訓練」のこと）において、**老年が、生涯における肯定的瞬間、達成の瞬間、頂点になる**
- あらゆる身体的な欲求から解放され、政治的野心を諦め、自由になり、あらゆる経験を積んだ日に、老人は自分自身に対して主権を振るうもの、自分に満足している者になる
- 十分準備されてきたらば、老年に、自分自身がようやく自分自身にたどり着く（**the self arrives at itself**）、追いつく（**one returns to one's self**）、統御（**mastery**）と満足という完成された完全な関係を取り結ぶ

- その1；老いるために生きる
 - 上記から、老年は単に人生の終わりや生の衰えと見なすべきでない
 - **老年は、むしろ生存の積極的な目標 (a goal of existence) とみなされるべき**
 - 老年という固有の形式と固有の価値が、人生を通した極になる（orientate 方向を指し示す）べき
 - 重要で典型的：セネカの手紙
 - セネカが言及する、これまでの生活のあり方
 - ギリシアとローマの倫理の主題
 - ；人生はさまざまな年代 (different ages) に分かれていて、それぞれの年代にそれぞれ固有の生活様式が対応している
 - ピタゴラス派
 - 生活様式と年代、それぞれが重視される一方で、倫理的な観点から、その人が選んだ生活様式、その人の生活の送り方、その人が到達した年代、これらがうまく調整されている (correspond 対応している) ことも重視されていた
 - 若者は若者らしく、老人は老人らしく
 - セネカはこれに同意しない
 - ある一種の統一性を提案している
 - =力動的、老年に向かっていく連続的な運動の統一性
 - =敵に追い立てられるように生きること
 - 敵=快楽への執着・力やお金を欲しがることによる感情や動揺
 - できるだけ早く、この敵から逃げ出さないといけない
 - そのシェルターとなるのが、老年期
 - この意味において、老年期は人生の進んで向かうべきところになる=**「老いるために生き」なければならない**

- その2；老人になるために、老人のように生きる
 - 「老いるために生き」るのならば、老年は、作り上げられるもの、またそれに備えて訓練されるものでなければならない
 - 自分の人生に対して、すでにそれが終わってしまったかのようにしてこれを生きる状態にならないといけない
 - 「自分の死よりも先に、生を完遂しなければならない」（セネカの手紙より）
=「君自身のまったき、完全な充足状態に」なるべき
 - セネカが（手紙で）ルキリウスに向かってほしいと思っているのはこの地点のこと
 - **老いるために自分の人生の計画をたてる (= organize) こと**
 - **老年に向かって急ぐこと**

- 若くともまるで老人のように自分の人生に関わる（=relation）こと
＝一連の重要な問題に関連している
- 死の訓練（= death exercise）...死の省察、死の実践
 - ：人生最期の日のように自分の生を生きること
 - 自分自身による満足と快楽の問題
 - 老いと不死の関係に関する問題
 - ：ギリシア・ローマの倫理において、老いはどのような点で不死や個人の生存に先触れし、関連していたのか？（老いと生や死という現象を捉えること）
 - ←解き明かすべき一連の問題の核心はこれ

自己への配慮の量的拡大

- ソクラテスがアルキビアデスに言っていた「他人を統治するには自己へ配慮せよ」とは言われなくなる
→今や「自己へ配慮せよ、以上。」
＝自己への配慮が、あらゆる人に向けられ、課される普遍原理になったということ
 - 歴史的・方法論的な問題
 - ：自己への配慮は、ヘレニズム及びローマ文化の中で、一種の普遍的な倫理の法をなすものであると言えるのだろうか？
- ※前提として留意すべきこと
- のちに中世になって進行した歴史的過程に惑わされてはいけない
...法律化（juridification 社会の慣習の法制化）
 - 規則の一般化が法律ではなく、法律が歴史の一部である
＝法律化の歴史は、主体の自分自身を対象とした実践の技術（techniques）技術論（technologies）の歴史
 - 法は、主体の歴史における一側面にすぎない

1. 自己への配慮が一般化したという虚構性

- 実際には、自己への配慮は限られた人のみが実践可能
 - スパルタ；自己への配慮をするために農奴に耕作をさせる
→自己への配慮はエリートの特権
 - 自己への配慮と間暇の概念（notion of the free time）との関連
※free timeは、もちろんレジャー的な意味ではない
 - いずれにしても、他の生活から区別された特殊な生活
＝この特殊性が、自己への配慮の現実的な条件に
 - よって、ギリシア・ローマ文化では決して自己への配慮が普遍的な法とされることはなかった
- 自己への配慮は閉鎖的、排他的な制度や集団における実践の内部で形作られてきた
 - 自己への配慮は新徒団体や友愛団体、学校や教団の実践や組織に結びついている
 - 自己への配慮は貴族階級だけでなく、民衆も実践していた
...自己への配慮の環境は特権的なものではなかった

- 恵まれない階級；自己への配慮の儀礼化
 - 宗教的な集団の存在と強く結びついた自己の実践
 - 儀礼化された手続き、宗教的・礼拝的枠組みによって、自己の個人的な探究や分析をしなくても良かった
 - ただし、自己への配慮は非常に重要な実践だった

 - 洗練され、練り上げられ、教養に裏打ちされた自己の実践
 - 個人的な選択、教養に溢れた間暇の生活、理論的探究に結びついている
 - 友愛ネットワークに依拠
 - ローマ文化の友愛；奉仕や義務の総体によって互いに結びつけられた階層構造（*hierarchical forms*）
 - ＝部分的に制度化された、一大社会ネットワーク
 - ＝自己への実践の大きな土台
- ↑
- ルキリウス、セレヌス、セネカらはまさにこれ
- セレヌス；半ば制度的な友愛関係の内部で、セレヌスはセネカに忠告を求める
 - これは、セネカは「魂の助力」を行ったと言える
-
- ここから見出せる、2つの大きな極（対極をなす）
 1. より民衆的、宗教的、信仰的で、理論的に粗野な極。
 2. 魂の手当、自己の手当、自己の実践。個別的、個人的で、教養を必要とし、恵まれた境遇と結びついて頻繁に見られるもの。友愛のネットワークに依拠している。
-
- ただ、実際には2種類しかないということではない。自体は遥かに複雑くそうした複雑さの2つの事例>
 1. エピクロス派の集団の例
 - 民衆が多く属する哲学グループ
 - 一定の理論的で哲学的な考察を少なくとも教説の習得を前提にしていた
 2. テラペウタイ派の例
 - ＝3つの軸、3つの次元があった
 - 一方に、宗教的・礼拝的实践がある
 - 他方に、知的、理論的な作業、知に関する作業全体に力点がある
 - ＝これらを通して、自らを治癒しにきているということ
 - 自己による自己の統御を美德の基礎であり根本だとしたこと
 - 毎日の儀式を指す用語は、魂への配慮という意味
 - これに、毎日献身しなければならない
- +
- 魂の配慮と同時に、知が強調される
- ＝物事を明晰にみる（*to see clearly*）見方を身につけることが目的
- ＝神を観想（*see*）できるような明晰な眼差しを持つということ
- ...彼らの学問に対する愛は凄まじかった
- 眠っている間ですら、彼らの夢は哲学の教義に関するものであった
- ※個人の清らかさと心理の権限の間にある関係の指南としての、眠りと夢も見出せる

- ここから、自己への配慮には、知、省察、修行、読書、寓意的解釈が関わっていることが明らか
- 自己への配慮は、信仰に関わるもの、治療に関わるもの、そして知・理論の様々な配合を持った、一定の、互いにはっきりと区別されたネットワークないし集団の中で形成されるものである
- 分断によってこそ、教団ないし集団の所属においてこそ、自己への配慮ははっきりと現れる
＝普遍的なものではない

すべての人に開かれるようになったが、限られた人のみ到達可能ということ

● 様々な身分や地位の踏襲の拒否

→様々な身分や地位の踏襲の拒否が、ここまで述べてきたような集団の存在理由をなしでいたし、集団の成功の秘密でもあった

※対して『アルキビアデス』では、自己への配慮は身分的な差異の中に刻まれていた

- 身分の違いはないとされるため、一般のあらゆる人が「能力を持つ」ことが可能
 - 一般のあらゆる人が、自己の実践を行うことができるということ。先天的な選別はない
 - 自己への配慮は、あらゆる場所で、あらゆる人に対して繰り返されることができる
- しかし、実際に自己へ配慮できる人は限られているというのもまた事実
 - 大多数の人は勇気がなく忍耐もない
 - 自己への配慮を聞き入れ、理解して自己の実践を実行に移す人はいずれにしてもわずか
- それ故に、自己への配慮はあらゆるところで繰り返されなければならない
 - 聞かれることが少なく、聞く術を知っているものはほとんどいないからこそ、自己への配慮の原則はあちこちで繰り返されなくてはならない

具体例；エピクテトスのテキスト

- 例として、＜汝自身を知れ＞（デルフォイの掟）に言及
 - それは世界文明（オイクーメネー＝ギリシア語を読み、書き、話す世界。/ 容認しうる唯一の人間共同体である、教養ある世界。）の真ん中にある石に刻まれている
 - 誰もが書かれた掟をオイクーメネーの中心でみることができる

↑
↓
 - 地理的に中心に置かれているが、（この掟の内容については）知られておらず理解もされていない

- ソクラテスの例に話題を転じて指摘
 - 「ソクラテスのもとにやってくるすべての人に、ソクラテスは自分自身に気を配るよう説くことができたのか？いや、千に一つもできやしなかった。」
 - ここには、一部の人/ それ以外の人々、上位の者/大衆、最良のもの/群衆、という分割（伝統的形式）
 - かつては、階層によって自己への配慮の可能性が分断されていた

↑
↓
 - この分断は階層ではなくなった
=（自己を受け入れる）能力がある者（capable）と、そうでない者の分断に
 - この差異を規定するのは、自己への関係、自己への関係の様態や型、自分自身を実際に気遣う対象として練り上げられてきたそのやり方
 - 限られた人しか実際に自分自身に配慮できないからこそ、あらゆる人に呼びかけがなされる
 = 普遍的でありながら、一部の救済しか実現し得ない呼びかけの代表例
- ※キリスト教から生まれた形式ではない
- ↓

キリスト教へのつながり

- これは、後にキリスト教に見出されるもの
 - 西欧の自己及び自己への関係の問題
=呼びかけの普遍化/救済の希少さ という二つの要素を持つ形式において見出される
 - 一部の人によってのみ聴かれうる普遍的な原理と、誰もア・プリオリに除外されているわけではない希少な救済との間のせめぎ合い
=キリスト教の神学的・霊的・社会的・政治的な問題の大部分の核心に位置するもの
 - この形式は、自己の技術体系においてははっきりと分節化（articulated: はっきりと表現された）されている
 - ギリシア・ヘレニズム・ローマの文明は真の自己の陶冶（=才能・性質などを練って作り上げること）（variable culture of the self: 自己の可変的な文化）を生み出した
 - この陶冶の中でこそ、呼びかけの普遍と救済の希少性という形式が最高度に機能していた
 - さらに、この救済という考え方が全ての中心にある
 - すでに、自己への配慮の時期的な変化（青年期から老年期へ）によって、事故への配慮における目的と到達の問題が提起されたことを指摘してきた
- どのような点で私たちが救われるのかということ（What does it mean that we can be saved? 私たちが救われるということは、どういう意味なのか？ということなのか？）

- また、医療と自己の実践の関係性も見てきた
- 「自らを救い、自らの救済を行うこと」という問題に関わる

→健康でいること、病を免れるということ、死に向かいながらも死から自らを救うということとは？

- 救済というテーマにつながる...あらゆる人に呼びかけられるが、実際には一部の人にしか受け取れない救済

次回

- 自己の陶冶（culture of the self）の別の側面を取り上げる
- 「自分自身を涵養（かんよう 水が染み込むように、無理をしないでゆっくりと養い育てること）（cultivating oneself 自分自身を修養する、自己啓発する）する」「自分に配慮する」ことに関する自己への配慮が、可能な知と認識の対象としての自己を練り上げるのか？また、繋がっていくのか？
- これはプラトン主義とは全く異なるあり方

<ターム>

care of the self＝自己への配慮

practice of the self＝自己の実践

art of the body＝身体の技法

art of the soul＝魂の技法

<コメント>

- 「分断によってこそ、教団ないし集団の所属においてこそ、自己への配慮ははっきりと現れる」。自己への配慮が社会的な産物になったこと、さらにはそこに分断構造が必要であるということから考えるに、この時代では、所属が非常に重要ということか。その点で現代語が指す〈汝自身を知れ〉の系譜にある個人的な営みとは遥かに違うものになっていそう
- 一部の人だけが到達できる、って、どうやってそれが決まっているのか？こここそ、結構先天的なんじゃないのか？→機会こそ開かれているけれど、明確に能力の差を肯定するというシステムとも言えそう。できる/できないや、努力する/しないによって、その一部になれるかどうか、となれば、確かに救済に到達するのは一部の人のみになりそう。
- 2025年の日本に生きる私から見て、あまり魅力的に思えず、別に一部の人になったから何かがあるわけでもない気がしてきた（感想）。全員が到達すべきものであるかどうかはまた別の議論なのだろう。
- 自己への配慮の目的について、この時代の目的は「老いるため（＝自分の生の享受のため）」と言って良いのか、確認したい。また、ここにきて、ギリシアやローマ時代は「ポリスを統治するため」だったということであっているだろうか。このポリスの統治、他者への配慮や統治の時代のほうが、フォーコー的に自己への配慮の最盛期だったと言っているのは面白いかもしれない。